しぶちん

山崎豊子

しぶちん

新潮文庫　や-5-5

昭和四十年四月十日　発行
昭和六十二年一月十五日　二十七刷

著者　山崎豊子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・図書印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Toyoko Yamasaki 1959 Printed in Japan

ISBN4-10-110405-0 C0193

新潮文庫

しぶちん

山崎豊子著

新潮社版

1659

目次

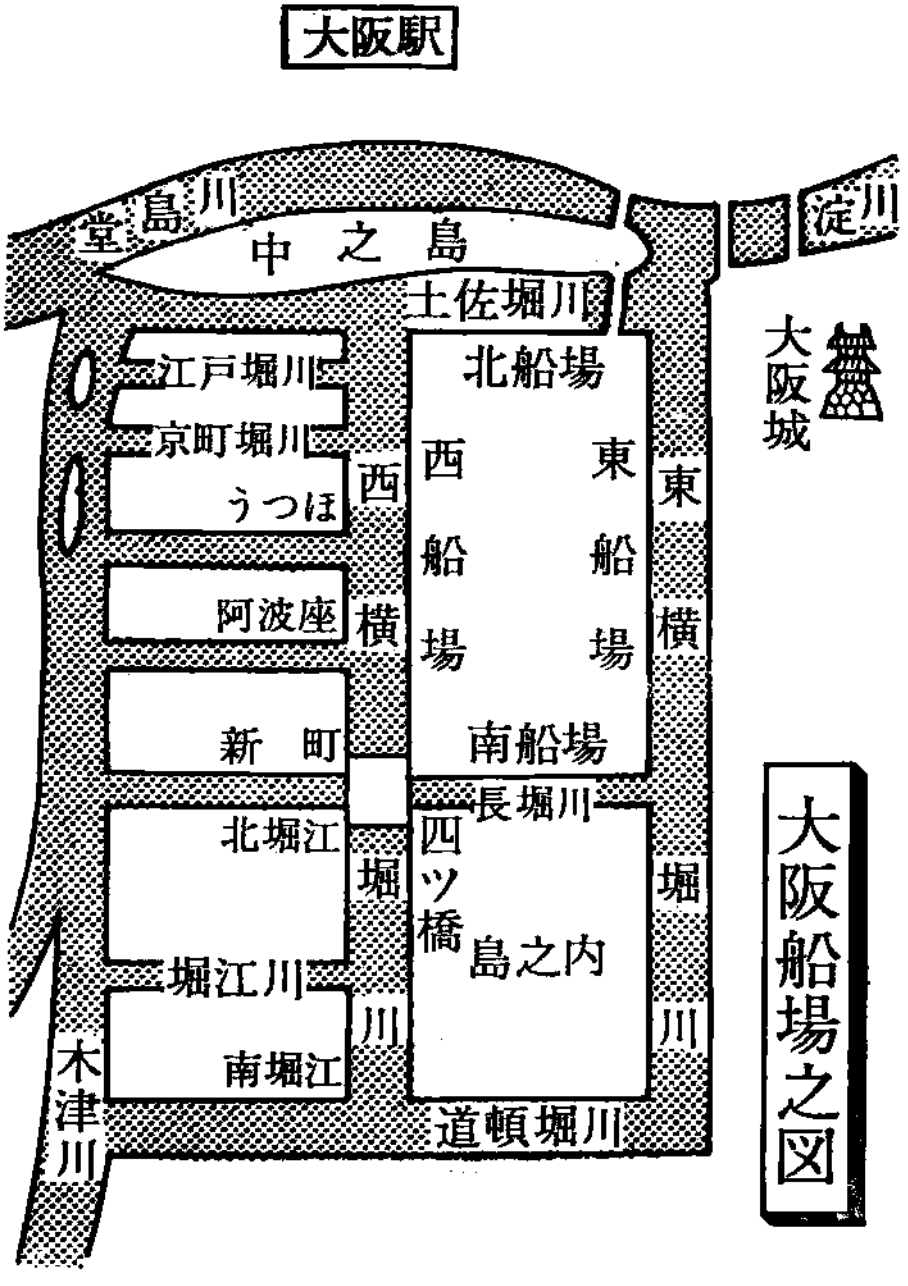
船場狂い……七
死亡記事……三七
持参金……六九
しぶちん……一〇七
遺留品……一三五
あとがき……一九〇

解説　山本健吉

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

しぶちん

船場狂い


大阪駅
堂島川
中之島
土佐堀川
淀川
大阪城
江戸堀川
京町堀川
うつほ
阿波座
新町
北堀江
堀江川
南堀江
木津川
西横堀川
北船場
西船場
東船場
南船場
東横堀川
長堀川
四ツ橋
島之内
道頓堀川

大阪船場之図

一

久女は、自分の眼の前を流れている長堀川をゆっくり渡りかけた。橋下の鈍色に澱んだ川面には、藁しべや卵の殻が浮かび、秋の陽の光りが、薄い影を落している。

この長堀川を隔てて北向うが、船場といわれる大阪の富商の集まる街であった。船場は、長堀川、西横堀川、土佐堀川、東横堀川によって、額縁のように取り囲まれた四角な地帯で、隣接している街とは、おのおの橋で往来するようになっている。この四つの川は、いずれも五間そこそこの川幅をもった、何の変哲もない街中の川に過ぎなかったが、久女にとっては、いつも自分を、遠いところへ押しやってしまうとてつもない広い川筋に見えた。

五十四歳の久女は、この川筋に懸った橋を渡って、船場へ移り住み、御寮人さん（奥さん）御家はん（女隠居）と呼ばれてみることが、生涯の念願であった。

そんな久女は、着物の着方にまで船場風を心得て、更衣のしきたりをきちんと守っていた。船場では、気温の寒暖にかかわらず、四月一日から男女ともに袷になり、外出には必ず袷長襦袢と袷羽織を着用する。六月一日からは単衣になり、菖蒲節句から帷子、麻長襦袢、絽羽織、浴衣は六月十五日から、七月一日から薄物、紗の羽織、九月から単衣、十月から袷という更衣のしきたりがある。これを少しでも間違えると、世間から、みっともないとうしろ指をさされるが、久女

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

は、そんなところにまで気を配って、季節の変り目ごとに寸分違えず、船場流の更衣をして、お茶のお稽古に通っていた。

お茶のお稽古も、格別にお茶が好きだったのではない。本町四丁目の裏千家のお稽古場は、場所柄、船場の御寮人さんが沢山集まっているから、ここで御寮人さんたちと近附きになるのが、久女の目当であった。

久女は、地味で目だたないが金目のかかった着物を着て、それだけの気持の余裕をもった上で、いつも御寮人さんたちのお道具自慢の聞き役に廻っていた。

「へえ――、また、ええお道具買いはりましたんでっか」

「さよだす、うちの旦那はんが、えろうお道具に凝りはりまんので、今度、新しいお茶室を作りましたついでに、ちょっと出もの買うただけでござりまんねん」

「出もの云いはっても、紅葉呉器のお茶碗やったら、なかなかわてらでは簡単に拝めもしまへん。是非のこと、近いうちに、お道具拝見させておくれやす」

こう持ちかけて、いつの間にか、船場の良家（ええし）へ出入りするようになった。

この日は、新しくお稽古場へ通って来る鋳物問屋の御寮人さんの紹介があった。順慶町四丁目の兼松鋳物の御寮人さんで、三ヵ月ほど前に、後妻に嫁いで来たばかりであったが、姑は既に亡くなり、舅だけのせいか、嫁入り早々に、お茶のお稽古に出て来られる結構な立場であった。

面長の白い顔に、鼻筋が刃もののように薄っすり高く、眼尻がつり上っていたので、白狐のよ

うな感じがした。着物は小浜縮緬の袷に丸帯を胸高に締め、三つ紋附きの羽織という、まるで嬢はんのように着飾った装いであった。これが古顔の御寮人さんや御家はんたちの反感をかったらしく、最初から除け者扱いにされていた。八畳ほどの待合処に、五、六人がお点前の順番を待ち、自分の番が来ると、銘々の人に、

「お先いさんでござります」

と、丁寧にことわったが、誰も兼松の御寮人さんには、挨拶をかけなかった。

久女も、はじめのうちは、この三十五、六歳になったような御寮人さんを、皆と同じように除け者にしていたが、兼松鋳物問屋――順慶町四丁目――船場有数の商家――こう胸の中に思いあたると、俄かに席をたった。

用もないのに厠へたって、小用をすましたような振りをして、帰って来た時は、前と坐り場所を変えて兼松の御寮人さんの横へ坐った。そして、そっと膝をにじり寄らせて、辺りをはばかりながら、

「御寮人さん、おはじめて、わては小間物問屋を商いしとります円山だす、どうぞ、まあお楽に――」

と、古参らしい労りを見せた。

「いいえ、わてこそ、つい御挨拶が行き届きまへんと、すんまへん。どうぞ、お宜しゅうしておくなはれ」

と近附きの挨拶を返しながら、御寮人さんは、素早く久女の着物に目をあてた。

久女は、船場風の作法によって、秋ぐちの衣裳として、紋織の着物に、黒縮緬の袷羽織を重ね、繻珍の帯を締めていた。この作法にかなった久女の衣裳を見るなり、御寮人さんは、急に親しげな眼つきになり、嫁いで来たばかりの主人のことから、店の商い、先妻の残した二人の子供の話まで喋ったあげく、久女の顔をのぞき込むようにして、

「もし、お急きやおまへんでしたら、ご一緒に参じとおます」

と、連れだって帰ることを、誘いかけた。

お点前をすまして、お稽古場の玄関先に出ると、兼松鋳物の女中と丁稚が、供待部屋で待っていた。女中は上女中らしく銘仙の着物を着て、丁稚は丁稚縞の木綿の着物に紺の前垂れをつけ、一眼で老舗の奉公人衆とわかる装をしていた。

「お待っとうさん」

鷹揚に犢いながら、御寮人さんは女中の揃えた畳表の下駄を履き、袱紗やはき替えの足袋を入れた風呂敷包みは丁稚に持たせた。

本町四丁目から、問屋筋のたち並ぶ渡辺橋筋に沿って南へ向かった。兼松の御寮人さんと久女が肩を並べて先にたち、五、六歩離れて、女中と丁稚が随いて来たが、女中と丁稚は、金物問屋の前へ来ると、きまって足を停め、

「今日は、毎度おおきに――」

と挨拶して通った。同業者に対する船場の作法であったが、久女はそんな背後の動きが気になって落ちつかなかった。兼松の御寮人さんは、まだ話し足りないらしく、ゆっくり歩きながら世間話をし、順慶町の辺りまで来ると、足を停めた。

「本日は、えらいご親切にお引き廻してくれはりまして、おおきに、わてとこ、ついそこでございまんねん」

順慶町四丁目の角から、四、五軒、東へ入ったところを指さした。五間間口の店構えの屋根の上には、古木に『兼松』と大きく記した看板が掲げられている。表の大阪格子を通して、忙しくたち働いている店内の模様がのぞかれ、店先で四、五人の丁稚が荒縄で荷作りをしていた。

「あ、そうでっか、ほんなら、わてはここでご免やす」

久女が小腰を屈めて挨拶しかけると、

「あんさんも、すぐそこの佐野屋橋でっしゃろ、わてとこのお竹どんにお店先まで、お送りさせまっけど、佐野屋橋の何丁目ぐらいでっか」

うしろの女中の方へ振り返って、行き届いた気の遣い方をした。

「いいえ、結構だす、わてとこは、佐野屋橋を渡って、向う側の南へ入ったとこだすよって」

「へえ、ほんなら、橋向うの鰻谷西之町でっか――」

こう云うなり、急に狐のような白い顔を、冷たく権高に構え、

「お先いだす、さいなら、ご免やす」

ついと背中をみせ、女中と丁稚を促すようにして、順慶町の角を曲って行った。

久女は、佐野屋橋を渡ってから、橋際に佇んでいた。たった五間幅ほどの澱んだ何の変哲もない川筋が、船場という大阪の尊大な街を型造っている。久女は佐野屋橋の手すりに手をつき、五十を過ぎてから急に白髪の殖えた頭を振るようにして、大きな吐息をついた。腹だたしい奇妙な気持だった。いつも船場という尊大な街から足蹴のようにされながら、かえってそれが、船場への強い執着になって行った。

久女は、今までも、同じような思いを何度か経験したことがある。

二

一度は、土佐堀川を隔てて、北船場と向い合った肥後橋の橋際であった。

久女は、この肥後橋の近くの堂島中町に生まれた。この辺りも、小売商、問屋が立ち並ぶ繁華な商いの街であったが、久女の子供ごころに真っ先に気附いたことは、土佐堀川の向うの子供だけ変った名称で呼ばれることであった。

男の子は、ぼんぼん。兄弟が沢山ある場合は、兄ぼん、中ぼん、小ぼんなどと云われていた。女の子は、嬢はん。これも姉妹の多い時は、嬢はん、中嬢はん、妹嬢さんという風に呼ばれた。

夏祭りになると、このぼんぼんや嬢はんの中からだけ、難波神社のお稚児さんが選ばれた。本祭りの午後から、船場の家並は麻布定紋入りの幔幕を張りめぐらせ、高張提灯をずらりと掲げ、

男の子のある家は、その子供の人数だけ、青貝細工に銀金具の飾提灯をたてて氏神の渡御を迎えるが、お稚児さんに選ばれた家は、さらに金屏風を張り出して店先を飾った。

賑やかな露払いに続いて、贅を尽した御神具、御神体の渡御にかかると、もう、御渡りの道筋は、御神体を迎える人々でぎっしり埋められる。御神体に続いて、夏枯れの商いを景気附ける暴れ神輿、そして、最後に美々しく衣裳を着飾り、人力車に乗った稚児行列が連なった。俥の上の子供たちは雛人形のように真っ白に塗った顔に、薄墨色の稚児眉を描き、朱房のように口紅を刷き、蟬の羽根のような透明なきれいな衣裳を重ねていた。人力車の幌のうしろへ、長方形の金紙に姓名を記した名札をひらひらさせ、俥の両側には、その家の定紋入りの紋付きを着た女中と丁稚が、徒歩で附き添っていた。

丁稚は、大きな団扇で、炎天の中を揺られるぼんぼんや嬢はんの顔を煽ぎ、女中は氷を包み込んだガーゼを、何度もぼんぼんや嬢はんの口にあてて咽喉を潤おわせ、お腹悪うせんといておくれやすと、囁いていた。

御渡り道を埋めていた人々は、稚児俥が眼の前を通ると、

「ああ、泉屋のぼんぼんや、あれが跡取りはんやぜ」

「あの前から三番目の別嬪さんが、吉田屋の妹嬢さんや、まだ六つぐらいやなあ」

などと、一々、その名前を呼びあげて、指した。その度に、母親に連れられて渡御を見に来ていた久女は、やや浅黒い顔を、真っ赤にして興奮した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com